
運がいい？

朝霧幸太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
運がいい？

【Nコード】
N0909Q

【作者名】
朝霧幸太

【あらすじ】

ショートストーリーですので、あらすじは記しません。

（前書き）

この作品は、お題を元に書きました。

晴天続きの夏の昼下がり。

涼太は休憩室に入った。

自販機の前で女子社員が何を飲もうか決めかねているようだ。後ろ姿だけでは判別出来ないが、営業部の娘ではなさそうだ。

早くして欲しいなあ。喉が渴いているんだから。何だっていいじゃないか。もう一分以上になるぜ。催促するしかないか。

涼太は声をかけた。

「どうしたの？」

「あつ！ 当たっちゃったんです。もう一本」

振り向きざま可愛い声で彼女は告げた。ピンクの口紅が似合っている。目元もぱっちり。若々しい肌艶。我が社に、こんな娘が居たっけ？

「ほほおっ、すごいね。運がいいね」

「あの……もし、良ければ……」

彼女は横に退いて涼太に好きな物を選ぶように促した。

「えっ、僕に？ いいの？ ラッキー！ ありがとう」

涼太が、リンゴジュースを取り出し、口をつけた時だった。

「あたし、隣の会社の者です。時々、ここを使わせていただいています。倉本綾と言います」

「そう。どおりで、わかんなかった。総務部の新人かなって」

「あたし、運がいいんです。この前も当たっちゃって。それで、石川さんって人に権利を譲ったら、夜にステーキをご馳走してくれました。あたし、ステーキが大好きなんです」

「うぶっ、げほっ」

涼太が咽せた。

「わ、わかったよ。つまり、それは僕にステーキを奢れってことなんだね？」

了

（後書き）

お題

晴天

ジュース

昼下がり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0909q/>

運がいい？

2011年1月16日08時24分発行